

# 29P-am05

諸外国における医師と薬剤師による薬物治療の実態調査に関する報告

○岩月 進<sup>1</sup>, 野本 禎<sup>2</sup>, 岡崎 光洋<sup>3</sup>(<sup>1</sup>ファーマケア, <sup>2</sup>東日本メディコム, <sup>3</sup>北海道薬大)

【目的】薬物治療は常に変化している。使用される医薬品そのものの変化はもとより、未知の副作用や適応症の拡大による対象疾患の変化もあることに加えて、患者の状態や状況も千差万別である。医薬分業が進展し、約65%の患者が、処方せんによる薬剤師の調剤を経て医薬品を手に行っている状況でありながら、今一つ「医薬分業」の成果、薬剤師の仕事ぶりが十分に引き出されていない、との指摘がある。

そこで、米国の主に病院におけるCDTM (collaborative drug therapy management = 医師と薬剤師の協働による薬物治療) や英国における薬局薬剤師による限定された医薬品の直接供給を保険償還の対象とする仕組みPGD (Patient group directions) の状況とこれらの仕組みに参加する薬剤師に要求されるスキルについて、我が国における薬剤師の業務の質的向上に結びつけながら考察してみた。

【報告】米国ワシントン州シアトルで行われている CDTM 共同薬物治療管理と英国ロンドンで行われている薬局薬剤師による限定された医薬品の直接供給を保険償還の対象とする仕組み PGD (Patient group directions) を中心に、薬剤師業務の質的向上について、13 改訂調剤指針の記述も交えながら報告する。